

団体名	特定非営利活動法人 かしわのもり	所在地	鹿追町
団体概要	<p>2003年に訪問看護ステーションを設立し、十勝エリアで広域に僻地医療を担っている。2018年より北海道小児等在宅医療連携拠点事業地域拠点事業を北海道より受託している。</p> <p>訪問看護や在宅医療といったフォーマルなサービスだけではなく、地域活動にも積極的に取り組んでいる。</p>		

ここから実験室

背景	<p>訪問看護・在宅医療などに携わる中で、医療的ケアを必要とする子どもたち、発達障害の子どもたちやその家族など、支援が必要な人たちが十勝地域・鹿追にも多数いることが分かっていた。暮らしづらさを抱えている子どもたちが生き生きと生活していくためには、「できることを伸ばす」ことや、「一人ひとりの強みを追求する支援の場やしきみ」が必要と感じていた。</p> <p>また、発達障害児の家族や、地域の基幹産業である酪農家に嫁いだ方など、就業形態から孤立している女性がいるという実態も把握していた。</p>
活動内容	<p>「ここから実験室」では以下の3つの活動を行っている。事業名には、「失敗を繰り返してもいい、またここから始めよう」という思いを込めている。現在、活動の拠点は設けておらず、開催に合わせて公共施設を借りている。</p> <p>①子どもたちの成長過程に目を向けた活動</p> <p>休眠預金の事業の軸となる。就学前～小学3年生の子どもたちを対象に、年5～6回の体験型プログラムを実施している。年齢は、就学前後に支援を受けるかどうか迷いが生じる時期に寄り添うよう設定している。それ以後は、行政や民間を含めて既存の支援がある。</p> <p>プログラムの実施には、消防署とコラボしたチョークアート、図書館とコラボした読み聞かせ、JAとコラボした特産のサツマイモの植え付け・収穫体験、然別湖の観光関係者とコラボした町探検など、多機関の協力を得ている。さらに「ここから隊」という個人ボランティアたちの力も大きい。</p> <p>②孤立しやすい女性や生きづらさをもつ人と楽しみを共にする活動</p> <p>孤立しやすい女性が楽しみを持てるプログラムを作ろうと、「カフェ」という形でワークショップをしてきたが、うまく思いが伝わらなかった。そこで、休眠預金の事業開始とともに、コミュニティデザインの専門家からのアドバイスを得て、じっくりと地域を観察しどんな場が必要か考察した。</p> <p>「こども部」「あんこ部」「毛糸部」など、得意や地域性を生かした5つの部をつかって活動を開始している。部員となるのは地域の人で、支援する人・される人の境界はない。</p>

③レンガの家プロジェクト

これまで活動の拠点がなかったため、空家を利用して拠点を整備している。完成は 2023 年秋を予定。当事業の出口戦略であり、改築費用などに休眠預金の助成金を充てる予定はない。

活動を実施する中での気づき・発見（成果・効果）

2 年 3 年と継続して参加している子どもたちには次第にリラックスした姿が見られるようになった。それとともに、子どもたちが子どもたち同士で育ち合うということが分かってきた。活動日以外でもスタッフやここから隊とあいさつを交わすなど交流が生まれ、また実験室を卒業した子どもたちが、今度はサポートする側になってくれている。

課題、今後取り組もうとしていること（展望）

医療や福祉が、病院や施設という閉ざされた空間の中ではなく、暮らし（町）の中であって町と一体化することを目指している。「あったらいいな」ということを実験的に実施し、その都度変化を捉え、修正を繰り返すのが大切なことを休眠預金の振り返りで学んだ。この「見通し（Anticipation）、行動（Action）、振り返り（Reflection）」の AAR サイクルを活用して事業を進めていく。

レンガの家は、福祉施設ではなく地域のさまざまな活動やつながりが生まれる場になるよう準備をしていきたい。完成までの 1 年をかけて、地鎮祭や環境整備などを子どもたちと一緒に行うプログラムを考えている。地域の人、医療的ケア児、どんな人でも入りやすく能動的に利用できるいきた場所になるよう、地域の人たちとワークショップを行うなど、全年齢が関わるようなしくみを創っていく。



ここから実験室の子どもたちとここから隊



拠点として整備する予定の「レンガの家」

活動内容に関する問い合わせ先

特定非営利活動法人 かしわのもり 統括所長 松山なつむ
電話：0156-66-1230 メール：oak@kashiwanomori.jp